

沈む都 邪市

La capitale che sprofonda Citt`a depravata

風呂に沈み込んで水面を見上げると、誰かに殺されてゐるやうな気持ちになる。私はその感覚を悦（よろこ）び、考へ事をするときには風呂の底に沈むのが常であつた。

地中海のとある島のホテルに異教崇拜の調査に訪れた私は、いつものやうに宿泊先のホテルの浴槽の底に身を沈めて天井を見上げてゐた。

波打つ光のせいだらうか。私はそのまま遠く異国の風呂桶の中で意識を失つてしまつたのだつた。

次に目を覚ました時、私は見事に贅（ぜい）を凝らした部屋に居た。しかし驚くべきことに、依然として私は水の中に居るのだつた。つまり、この部屋全体が水の中に沈んでゐるのだ。すぐにこれは水没した異教の都であると察せられた。しかも部屋の装飾の見事さといひ、全ての柱に押された王家の刻印といひ、ここが王宮の一部であることは疑ひやうの無いことであつた。

頭を巡らしてみると、まさに王と覚しき人物が、見たこともないほど精緻な細工のマホガニイの椅子に座り、悲嘆に暮れてゐた。王の涙は、水の中にあつてなほ、止めどもなく溢れ出るのであつた。

「王よ、何を嘆くのか？」

王は驚いて私を見上げたが、無言のまま或る方向を指さすと、再び嗚咽を漏らし始めるのであつた。

指差された先には天鵞絨（ビロオド）の張られたソファがあり、その上で貴婦人が子供服に刺繍を施してゐる。足元には天使と見紛ふやうな愛らしひ子供がふたり寄り添つてゐた。

しかし彼らはその儘（まま）びくりともしないのだ。不思議な力で封じられてゐる。怪訝（けげん）な顔をしてゐる私に、王はぼつぼつと語り始めた。

わしは『胸に空気の精（エアリエル）の棲む王』と呼ばれる程に水中での息が長ひのだ。そこでわしは『沈む都』を造らせることを思ひついた。全てが水で満たされた都。天上で波紋に沿つて広がる陽光を背に、街の窓から窓へ飛び回る空中浮揚の感覚。わしは大地の力から解き放たれ、神々が天空を舞ふが如く都を彷徨（さすら）ふ己が姿を夢想し続けたものだつた。

そこで海べりの土地を大きく掘り下げて、その中に街をひとつ造つた。七年と七月の後、つひに『沈む都』は完成し、いよいよ満月の夜に満潮を待つばかりとなつた。といふのも

この辺りでは十二年に一度、満月の晩に大きな津波がやってくるからだ。

我が国民と愛する家族が住む『都』と『沈む都』の間には小丘があり、これが防波堤の役割を果たす。小丘の上には大きな烏頭（うとう）を戴く神像が建てられてをり、この高みから、わしは美酒を傾けながら、津波の訪れを待つた。

陽が落ちるとともに、遙か遠くまで海岸線が退ひてみく。さうして魔眼のやうに開ひた満月が上ると、不気味な地響きとともに、巨大な壁と化した海面が走ってくる。

月を隠すほどに高まつた黒い壁が、どうと崩れ落ち、『沈む都』は一瞬のうちに水面の下に消へた。その水はあまりに激しく、小丘に居たわしの爪先を舐めたほどである。わしはこの街の中を自由に泳ぎ回る様を想像して、陽の昇るのも待ち切れぬ想ひに駆られたものだ。



しかしあの惨劇は、その直後に起こつた。

わしが居た神像は「半陰陽（ふたなり）の神」であつた。天然の巨岩を刳（く）り貫いでできたもので、中は空洞（うろ）になつてゐる。しかし『沈む都』建都の際に生じた、どこぞの亀裂から流れ込んだのだらう、津波の巨大な圧力で、大量の水がこの空洞に殺到した。さうしてさながら間闕泉（かんけつせん）のやうに、満潮の波は空洞の中を一気に上昇して、神像の烏頭部（うとうぶ）を内部から吹き飛ばしてしまつたのだ！

嗚呼、その途端、半陰陽の神像は七色の光芒（こうぼう）を放ち、大ひなる呪いの言葉を掛けてきた。

「王よ」

と神像は言った。

「おまえは空虚（うつろ）を保つべき我が聖なる内壁を、十二年に一度の狂へる水で満たした。今や我が身に掛けられた呪縛は解かれてあり。その呪縛は『都』の上に降り注ぐであらう。半陰陽（ふたなり）の神たるこの我は、自らの剣を以て自らの泉を犯し続ける。そして永きにわたる蓄怨の精を放つとき、『沈む都』は丘よりも高く浮上し、呪われるべき『都』は水底深く没するであらう」

半陰陽の邪神の言ひ終わらぬうちに大音響が鳴りわたり、神像はぶるぶると震へだした。それまで力なく股間に垂れてみた陽物（ようもつ）がみりみりと怒張してくる。さうしてすぐ下に位置してみた自らの女陰（ほと）を犯し始めたのだ。己が女陰に入り続ける陽物はますますその動きを速め、空を切り裂くやうな奇音を挙げて精を放つた。眩（まばゆ）いばかりの閃光が、吹き飛んだ烏頭の孔（あな）から翔び出し、『都』へ降り注いだ。

かうして『都』は、一瞬のうちに緊縛呪の静謐（せいひつ）に包まれたのだ。

わしは『都』へ駆け降りた。往來を歩く人々がびたりと止まつてゐる。酒瓶を手に高歌放吟してゐた者は傾いた椅子の上で。男に騙された処女は相手の頬を張らうと手を振り上げたままで。木の枝で眠つてゐる小鳥に跳びかからんと塀を蹴つた猫は、空中に身体を踊らせたままで。

宮殿に戻ると、愛する妻と子供達がやはり呪縛の虜（とりこ）となつてゐた。わしは美しいまま禁縛の餌食となつた妻に跪（ひざま）づいて慟哭（どうこく）した。わしは妻を、子を、忘れてゐた。この『都』を忘れてゐた。『沈む都』だけを夢見てゐたのだ。夢こそがわしの現実（うつつ）だつたのだ。

やがて轟音と共に邪神像が粉々に砕け散ると、大地の鳴動を引き起こし、妻と子供達が居るこの『都』の地盤を沈下せしめた。溢々（いついつ）たる水を淇（たた）へた『沈む都』が迫上（せりあが）つてくる。さうしてつひに神殿のある小丘の高さを越え、全ての水が、どうと『都』に流れ込んできて、全てを呑み込んでしまった。

それ以来、ここでは時が流れないのだ。

皆、死んだ訳ではない。妻も子供も都も、全てが美しいままここに留まつてゐる。……かう言つてはいかんのだらうが、最近ではこんなふうにも思へてくるのだ。これこそわしが願つてゐた事なのかも知れぬ。所詮は紛（まが）ひ物の『沈む都』ではなく、本物の『都』を沈めること。人々が生きて日々の業（なりわい）を営む『都』を沈めること。それこそわしが心の奥底で望んでゐたことではなかつたか。たとえそこに愛すべき妻や子供達が居たとしても。

実際、妻と子に対する慈愛の情は、この水底に沈んで以来、日に日に深まるばかりなのだ。呪ひのおかげで彼らは苦しまず、美しいままで、美しく沈んだ都に居ることができる。愛する者がその姿を残したまま思ひ出になつてゐるのだ。この事実こそ、この『沈んだ都』を真に完成させてゐると言つても良い。わしは「半陰陽（ふたなり）の神」に感謝したい

くらいな気持ちだつたのだ……

王の話はそこで終つた。しかし依然として私の疑念は晴れないままである。

「しかし貴方（あなた）はさつき泣ひてゐた。もう一度問ふ。王よ、何を嘆くのか？」

「泡だ」王は言つた。「小さなひとつの泡が、身の毛も弥立（よだ）つほどの恐怖をわしに与へるのだ」

「その恐怖とは一体何か？」

「ある日、妻の鼻から、小さな泡がぷつりと出てきたのだ」

王の声は再び悲壮な色を帯びてきた。

「それはかういふ可能性があることをわしに気づかせずにはおかなかつた。つまり、時は完全に止まつてゐる訳ではなく、ただ非常にゆつくり流れてゐるだけかもしれぬ、といふことだ。身動きもできぬまま、妻たちの肺には少しずつ水が入り込み、気が遠くなるほど緩慢（かんまん）な溺死を迎へつつあるのだとしたら、こんな酷（むご）いことがまたあらうか？」

私は答へることができなかつた。丁度、美しい王妃の足元で甘へてゐる小さな女の子の蕾（つぼみ）のやうな鼻から、少し大きめの泡が、立て続けに七つも出てきたからである。

沈んだ都。そこに縛られた多くの人々の胸から押し出された泡が、窓から、路地から、ひとつまたひとつと陽光きらめく天上の水面に昇つてゆく様を目の奥に見ながら、私は再び気を失つた。

